滋賀文化財だより
NO. 177
1992. 9. 30
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

201. イスラエル考古事情(1)

—琴の湖・ガリラヤ湖—

1. ガリラヤ湖

東西12km、南北21km、周囲55kmを計るイスラエル最大の淡水湖がガリラヤ湖である。この湖はイスラエル北東部に位置し、東は有名なゴラン高原に接する。

ここの水はヨルダン川を南下し、死海へと注いでいるが、盆地状の地形に位置するこの湖は、イスラエルにとって最大の水がめであり、古くから南の乾燥地帯へ送水が行われている。

この夏、イスラエルを訪れる機会があり、ガリラヤ湖・ヨルダン川そして死海周辺のヨルダン川水系とでも言うべき地域を中心に、遺跡や治水・利水関係の施設、それに「博物館の国」と言われるイスラエルのいくつかの博物館を実見することができた。琵琶湖との比較としてもおもしろく、日本の考古学、博物館にとっても学ぶべき点が多かった。そのいくつかを紹介していきたい。

湖には「聖ペテロの魚」と呼ばれるテラピアのほか約20種の淡水魚が成息し、漁業は観光と並んで重要な産業となっているが、特にテラピアは、かつての日本の魚屋にもイズミダイと称して並んでいた馴染み深い魚である。

緯度が日本とほぼ同じ所に位置するこの湖は、「旧約聖書」では「キネレトの海」と呼ばれる。湖の形が竪琴（キノール）に似ているからだという。また、「新約聖書」では、イエスとその弟子達の活動の舞台としてたびたび登場して、キリスト教徒の巡礼には欠かせない地となっている。

何故か比叡山を擁する天台の故地を思わせる。

先史時代以降、十字軍やトルコ時代までの遺跡も湖底や湖辺に多く、琵琶湖と同様に発掘も行われている。

ガリラヤ湖東岸でこの夏、銀器時代エン・ゲヴ遺跡の発掘調査が実施された。ガリラヤ湖の治水・利水、漁業の実態調査に加えてこれに短い期間ではあったが参加し、テル(Tel)での層位的なイスラエルの発掘調査方法を学ぶ機会を得た。

ガリラヤ湖と琵琶湖は、その位置、地域の中で果たした役割や人間との係わりの歴史が酷似していることが知られるが、一方で、全く異なる地理的状況、民族や周辺地域とのかかわりの固有の歴史がある。

今回は、ガリラヤ湖を中心に取り上げる。

2. ヨルダン川水系の状況

(1) 観　　光

ティベリアはかつてユダヤ教の聖都として栄え、今は行楽地ガリラヤ湖の中心地である。一方で漁業も盛んなようである。

熱海に似た景観を呈するこの町は湖の西岸に位置し、古く紀元前後には人や魚、その他物資を運ぶ船が多く浮かんでいたと言うが、現在では交通手段としての船はない。観光船乗り場はホテル、レストランが立ち並び、浜大津以上の賑わいを見せている。

観光船は後に紹介するエン・ゲヴ遺跡が所在するキブツ・エン・ゲヴ、そこの経営になるキネレト・セイリング・カンパニーが運行しており、ティベリア、エ

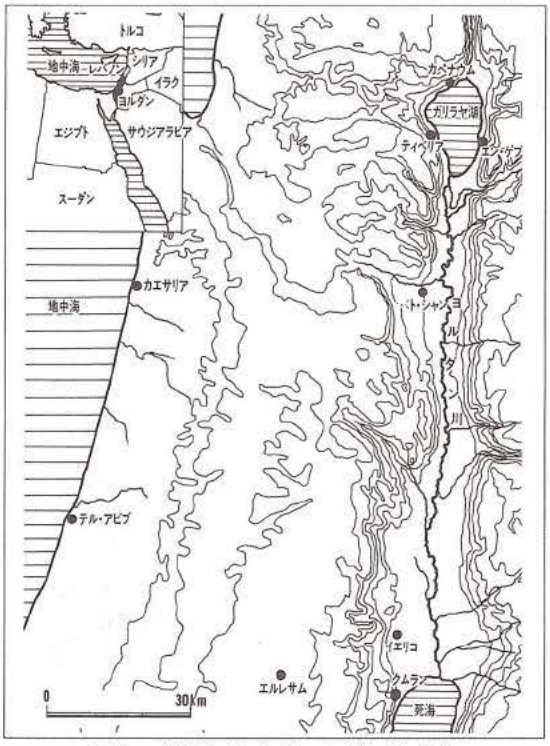


図1　位置図およびヨルダン川水系

ティベリアの観光港(対岸はゴラン高原)

ン・ゲヴ、カペナウムの3つの港を結んでいる。昼の遊覧船のほか、ナイトクルーズ、ディスコバー、レストラン、船上ショー等が行われていた。

今やキブツは農業だけやっているのではない。

(2) 漁　　業

ガリラヤ湖の漁業の歴史は古く、聖書にも漁師は度々登場し、古代の港も、お会いした地元の研究者メンデル・ヌーンによると13個所確認されているという。

今では先述のテラピア（セント・ピーターズ・フィッシュ：「聖ペテロの魚」）のほか、バルブスやキネレトのいわしと呼ばれる鯉の仲間、ヒレナマズ、ハクレン、ボラなど22種の魚を獲っており1940年代には4〜500トンであったものが80年代には1800〜2000トンの水揚げを誇るようになっている。しかし、漁獲量は政府により厳しく制限されており、稚魚の放流も盛んである。

琵琶湖のそれよりなお小型の漁船も多く、船底に反りがあり、幅は長さに比べ広いずんどうな船体である。ガリラヤ湖は170平方kmと琵琶湖の¼程度の広さであるため、早く走る必要がないこと、もともと竜骨に肋材を並べ、外板を張る洋式船の特徴を引き継ぐからであろう。

ティベリアのローマ時代のコインやマグダラの1世紀のモザイクの船でも船底の反りが見えるが、興味を

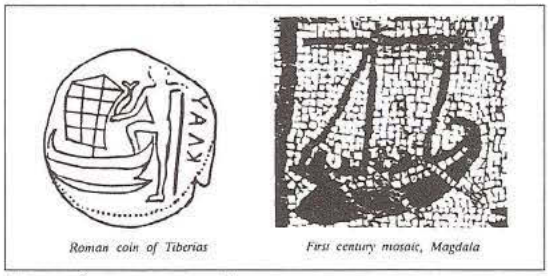


図2　(Mendel Nun 〝THE SEA OF GALILEE and ITS FISHERMAN in the New Testament〟 1989)

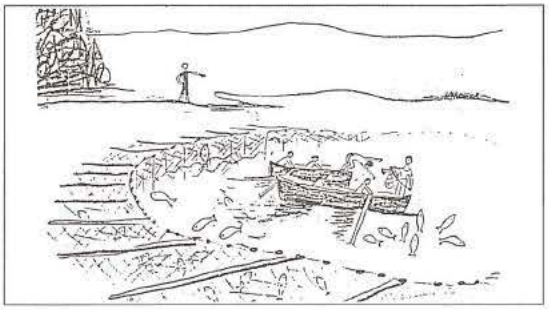


図3　ベランダ・ネット漁の様子(Mendel Nun 〝前掲書〟)

引くのはそれらに見る船首の構造である。琵琶湖周辺では4世紀になってから初めて出現する準備造船の船首構造と酷似しているからである。ガリラヤ湖のような内水面でも、琵琶湖より300年も早い段階で一般的であったことを知ることができた。

漁法は引網（dragnet）のほか投網（cast- net)、刺網（trammel net, gill- net)、一本釣り（hook and line)、巾着網・巻網（purse- seine net)、それにベランダネット（veranda net）と呼ぶものが一般的なようである。ベランダネットは長さ2〜3mの棒状のものに支えられた長い網を水面にベランダ上に敷き詰め、魚をその上に跳ね上げるようにして獲る漁法で、琵琶湖では知られていない。

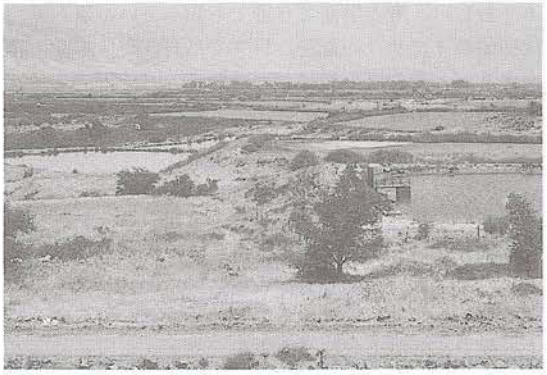
一方、刺し網の中でもthree- walled construction of trammelと呼んでいるものは、琵琶湖のフナサンマイなどと呼ぶものに似る。また、湖から見つかったという古代の碇石は、粟津貝塚で発見されたものとうりふたつであった。

イスラエルは乾燥地帯というイメージが強いが、ガリラヤ地方は多量の降水、谷地域の平坦な地形、その赤色粘土質の土質によりかつて多くの沼沢地があった。そしてそうした余剰水と湿地帯でのマラリヤの発生はこの地方の悩みの種であった。これを解決したのが養漁場である。

イスラエル全体の養魚場51平方kmのうち、¾はガリラヤの谷地域にある。主にガリラヤ湖の北のヨルダン川上流域、ガリラヤ湖河口からヤルムク川合流地付近、それに少しヨルダン川を下がったベト・シャン付近の3個所に集中し、ティラピアを中心に養殖が行われている。景観は水を張った春先の水田のようであった。

(3) 治水・利水

ガリラヤ湖は、砂漠地帯の端に位置するイスラエルの唯一最大の水瓶であり、ここから汲み上げられた水は導水管（モービル・アルツ：Mのマーク入り）で、南のネゲブの砂漠地帯などイスラエル全土に渡って供給されている。



ベト・シャン近くの養魚場(向う側はヨルダン)

ヨルダン川デガニヤダム(ガリラヤ湖版「瀬田川洗堰」)

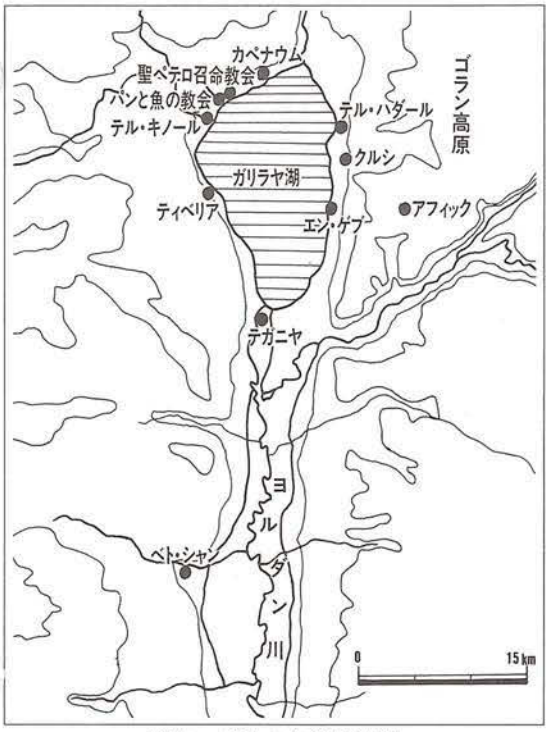


図4　ガリラヤ湖周辺図

カエサリアの導水橋(右は地中海)

イスラエルの水資源は一つの配水網に統合されており、その中心がナショナル・ウォーター・キャリアと呼ばれる国営水輸送網で、1964年に完成している。その中心となるのがガリラヤ湖・ヨルダン川である。

先に汲み上げると称したのは、ガリラヤ湖が海面下約212mに位置するからで、参考までにここから流れ出た水はヨルダン川を南下し死海へと注いでいるが、死海の水面レベルは海面下約400mである。

ガリラヤ湖の水位は1932年にヨルダン川河口に築かれたデガニヤ・ダムによって人工的に管理されているが、通常、夏のおわりが最も水位が低く、春には高水位になるようである。湖の最深部は約50m、貯水量は約45億m³であり、デガニヤ付近のヨルダン川流水量は4億5000万m³と言われている。

現在のデガニヤ・ダムは琵琶湖で言う瀬田川洗堰に相当するが、思いのほか小規模で、ゲートを二つ備えて上は道路となっている。川幅は15～20m程度と見た。琵琶湖の周囲に多くある逆水防止用の樋門の大きなものと言った感じである。しかし、これがイスラエル国民の生命を左右するものと言っても良いものとなっている。

ちなみにイスラエルの年間水資源使用量は15億m³であり、そのうち4億5000万m³をヨルダン川から得ているわけであるから、地表水総計9億5000万m³の約半分はガリラヤ湖の水をたよりにしていると言ってよい。

ヨルダン川とシリア国境から流れ出てくるヤルムク川合流地点付近では、ヨルダン川は郡市河川あるいは大型排水路状となっていたが、それより下流はヨルダンとの国境となっており近づくことはできなかった。ただ死海近くでは、砂漠というか、聖書で言う「ユダの荒野」と言う表現が近い感じがする平原の中に1本の道だけがあるという景観の中で、道と平行する導水管だけが目立っていた。

場所や水系は異なるが、地中海に面したカエサリアでローマ時代の導水橋を見ることができた。カルメル山から20kmほど伸びている高架式のもので、二つの水

テル・バダール遺跡とガリラヤ湖

路がセットであり、南禅寺境内の琵琶湖疏水のそれを思わせる。

(4) 遺　跡　群

ガリラヤ周辺でそのほとりに位置する遺跡をいくつか訪れた。

テル・ハダールは東岸、テル・キノールは北岸に位置し、エン・ゲブと共に湖に面した都市遺跡である。テル・ハダールはヨルダン川からガリラヤ湖東岸を通りダマカスカルへ向う要衝にあたり、テル・キノールもガリラヤ湖から地中海に面した古代の港町アッコに出る道筋にあたる。湖上交通と無関係にはこれらのテルの立地を説明できないものである。

またガリラヤ湖東岸に位置するクルシもビザンチン時代の修道院で、現在は建物の壁や柱も復元され、訪れた時、露天の祭場では10人ほどの熱心なユダヤ教信者による儀式が行われていた。復元された遺跡が生きていた。

ガリラヤ湖北岸のパンと魚の教会、聖テペロの召命教会は、キリスト教ゆかりの地である。前者は5世紀の魚のモザイクが床に残っており、ガリラヤ湖周辺のイエスの弟子はほとんど漁師であったという伝承、あるいはキリスト教と漁師のつながりの深さがうかがわれる。

ガリラヤ湖からヨルダン川を少し下ったところにあるのがベト・シャンの遺跡で、古来よりエジプトからダマスカスへ向かう軍事的要衝の地であった。エジプト時代の神殿跡、ギリシャ・ローマ、ビザンチン時代のモザイクなどが残る大規模な遺跡で、今も発掘調査を進める傍ら修復・復元を行い、見学者を集めている。2・3世紀のローマの円形劇場は、現在もコンサート等に利用されている。

さらにヨルダン川を下り、死海へと注ぐ手前の西岸のオアシスの町がイエリコである。荒涼とした景色の中で緑に囲まれたイエリコの町は、オアシスと呼ぶにふさわしい。考古学徒なら誰でも知っている新石器時代初頭のイエリコの遺跡。日本では縄紋時代早期に相当するが、その塔や壁に改めて驚く。

ヨルダン川は、最後に死海へと至るが、その沿岸にクムマンとマサダという大きな遺跡がある。前者は20世紀最大の考古学的発見と言われる死海文書が見つかったユダヤ教エッセネ派の遺跡で、後者はヘロデ王の要塞で、後に、イスラエル版白虎隊の舞台となりヨセフスの「ユダヤ戦記」も伝えるいわば山城となった場所である。共通して言えることは、大きな貯水槽とそこへ繋ぐ水路群の施設が充実し、プラスターをきっちり塗るなど、どちらも水に対する備えは目を見張るものがある。マサダの貯水総量は四万トンとも五万トンとも言われている。これは今もそうであり、イエリコの西側山地の遊牧民ベドウィンしか住まない岩山の谷あいで、1本だけ残された水路にその伝統と言うか執念めいたものを見た。

1986年1月の雨不足で湖の水位が3～4m下がった折りに、湖中から発見された紀元前後の木造船を観察することも当初の目的の一つであった。この資料は、ガリラヤ湖西岸のイグアル・アロン・センターという博物館に保存されている。船は現在保存処理中であり、見られるのは2年後であるとのことであった。

3．ガリラヤ湖と琵琶湖

ガリラヤ湖と琵琶湖の比較は実に面白いというほかない。

琴と琵琶湖という名前の付け方、付けられ方のみならず、水がめであり、観光地であり、信仰の地であり、一方で漁業が盛んで、古代から交通の要衝の地でもある。湖辺に遺跡も多い。

テガニヤ・ダムと瀬田川洗堰、導水橋と琵琶湖疏水、漁の方法、ティベリアの港と浜大津、かつての木造船や碇石。湖の水の色も同じで、滋賀県では琵琶湖のことを「ウミ」と呼び、ガリラヤ湖はSea of Galileeと呼ばれる。

しかし違いも際立っている。水の色は同じでも向こう岸の景色は全く異なり、訪れた時が乾季の真っ最中であったからでもあるが赤茶けており、植生も違う。

水利用に対する執念は琵琶湖以上であり、多くの遺跡や今も生きる施設は我々に水の恵み、ありがたさを教えてくれる。

今回のイスラエル訪問にあたっては、テルアビル大学考古学研究所牧野久実氏の援助と協力を得てようやく行い得たことを記して、感謝の意を表したい。

（用田　政晴）